

20 世紀初頭のアメリカにおける歌舞伎「寺子屋」の受容(2)

大塚 奈奈絵

日本大学大学院総合社会情報研究科

The Reception of the Kabuki Play Terakoya in Early 20th Century America (2)

OTSUKA Nanae

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

Bushido from Terakoya or Matsu by Takeda Idzumo, the English version of the Kabuki play Terakoya by Samuel Atkins Eliot, Jr., was published in 1921 in Boston. It was actually translated from Karl Florenz's French version *Terakoya*. In translating one poem that represents the theme of the play, Eliot added the word "Bushido," emphasizing the loyalty of *samurai*. It seems that he was influenced by Nitobe Inazo's *Bushido*, which was widely read in America in the early 20th century. It is ironical that a *kabuki* play, which often questioned *samurai* values in feudalistic Japan, was received as representing such values outside of Japan.

1.はじめに

菅原道真の天神伝説に材をとった竹田出雲、並木千柳、三好松洛らによる浄瑠璃の人気演目である『菅原伝授手習鑑』の四段目「寺子屋」は、1888年に井上十吉により *Terakoya, or the Village School* というタイトルで英訳された。その後、1900年にはカール・フローレンツ(Florenz, Karl Adolf)のドイツ語訳とフランス語訳が出版されてドイツを中心にヨーロッパで広く翻訳・翻案され、上演されたことが知られている。

前稿の「20 世紀初頭のアメリカにおける歌舞伎「寺子屋」の受容(1)」では、1916年1月にロンドンの Iris Pub. Com. と New York Duffield & Com. から出版された M. C. マーカス (Marcus, M.C.) の *The Pine-tree (Matsu): a Drama, Adapted from the Japanese* に掲載され、1916年11月にワシントン・スクエア・プレイヤーズ (Washington Square Players) により *Bushido* というタイトルで上演された英語版「寺子屋」が、フローレンツのドイツ語訳からの重訳であったことを論証した。

本稿では、ワシントン・スクエア・プレイヤーズ

の一員でもあったサム・エリオット (Samuel Atkins Eliot, Jr. または Sam Eliot) が叢書 *Little Theatre Classics* (全4巻、1918-22) の第3巻に収録した *Bushido form Terakoya or Matsu by Takeda Idzumo* について、フローレンツのフランス語版からの翻訳の過程で、エリオットにより家や忠義の概念が強調されて翻案されたことを他の英語訳との比較によって論証する。

エリオットによる *Bushido* について紹介した先行研究はなく、また、英語への翻訳の過程や、それらがアメリカにおいてどのように受容されたかについての先行研究もなされていない。「寺子屋」は戦後の一時期、GHQにより上演を禁止された歴史をもつことから、前稿および本稿では GHQ の歌舞伎の検閲の背景となったと考えられる 1900 年代初頭のアメリカでの「寺子屋」の翻訳と受容についても、複数のテキストを比較することにより分析を行う。

2. エリオットの *Bushido*

2.1 演劇人エリオット

前述したように、エリオットが 1921 年に出版した *Bushido form Terakoya or Matsu by Takeda Idzumo* は、

フローレンツのフランス語版の翻訳であったが、エリオット自身が認めているように、翻訳の過程で原文にはない“Bushido”等の言葉を補い、「家」や「忠義」と「武士道」が強調されていることに特徴が見られる。

The Pine-tree (Matsu) を翻訳・出版したマーカスについては、資料がほとんど残されていないため詳細が分からない一方で、フローレンツのフランス語版 *Terakoya* を英訳したエリオットはアメリカ演劇史では小劇場運動のパイオニアとして著名な人物である。

エリオットは、1893 年 3 月 14 日にコロラド州デンバーで生まれた。エリオット一族は、イギリスの貴族の家系に遡るとされるボストンの名家で、父 Samuel Atkins Eliot II は牧師で米国ユニテリアン協会会長、祖父の Charles William Eliot はハーバード大学総長で世界文学全集の編者でもあり、曾祖父の Samuel Atkins Eliot はボストン市長、上院・下院議員をつとめた政治家であった。

エリオットは、ハーバード大学でアメリカ大学演劇の草分けとされる叔父の George P. Baker 教授のもとで演劇を専攻し、1912 年から 1913 年にかけてドイツで、1913 年には英国の劇場で演劇を学んだ後に帰国して、1914 年にはニューヨークでウィンスロップ・エイムス(Winthrop Ames)の小劇場の舞台監督となった。

当時の東海岸では、商業演劇に飽き足らない人々により、ヨーロッパの芸術演劇を理想とする小劇場（現在のコミュニティ・シアター）運動が盛んになりつつあった。ウィンスロップ・エイムスは出版業から演劇に転身し、新劇場でのシェークスピアや古典演劇のプロデュースに失敗を帰した後、私費を投じてニューヨークに小劇場を設立してグリム童話を翻案した『白雪姫と 7 人の小人』で成功した人物であった。

当時の小劇場運動の中心となったのは、グリニッジ・ヴィレッジに集まる文学青年達が 1914 年の実験公演を経て、1915 年 2 月に Bandbox Theatre, New York で旗揚げした劇団ワシントン・スクエア・プレイヤーズであった。後にシアター・ギルドと改称し現在まで続くことになるこの劇団は、脚本を重視し

てヨーロッパの演劇を取り入れ、芸術を愛好するとともに政治的にも進歩的な集団であったと伝えられている。エリオットは 1914 年から 15 年にかけてこの劇団のメンバーとなった後、1915 年 7 月に Indianapolis Little Theatre の監督に就任し、その後 1917 年には Cincinnati Art Theatre へと移った。

1918 年からは Smith College の助教授としてドラマと劇作のコースで教鞭をとり、1926 年には教授となった。エリオットは、一貫してヨーロッパの演劇を理想とし、芸術的な non-profit 演劇を目指した「アメリカの小劇場運動のパイオニア」とされている。Smith College の教え子には、後にブロードウェイのプロデューサーとなったシェリル・クロフォード(Cheryl Crawford)ら著名な演劇人がいる。

エリオットの著作には、ドイツの劇作家 Frank Wedekind の戯曲の翻訳の *Erdgeist* (1914)、*Pandora's Box* (1914)、および *Tragedies of Sex* (1923)の他、アンソロジーである *Little Theatre Classics* (全 4 巻、1918-22)がある。

2.2 Little Theatre Classics

Little Theatre Classics 全 4 巻は、1918-22 年に、ボストンの Little Brown and Company から順次出版された。それぞれの巻の内容は、以下のようになっている。

Vol.1: Polyxena from *The Hecuba* of Euripides

A Christmas Miracle Play: The Pageant of the Shearmen and Tailors in the Coventry Cycle of Miracles

Doctor Faustus by C. Marlowe

Ricardo and Viola from *The Coxcomb* of Beaumont and Fletcher

The Scheming Lieutenant from *The St. Patrick's Day* of R.B. Sheridan

Vol.2: Patelin from *Maitre Pierre Pathelin* by G. Alécis

Abraham and Isaac from the Book of Brome and the Chester Cycle of Miracles

The Loathed Lover from *The Changeling* of Middleton and Rowley

Sganarelle or Imaginary Horns from Molière

- Vol.3: *Bushido from Terakoya or Matsu* by T. Idzumo
The Old Wife's Tale by G. Peele
Pericles from Shakespeare
The Duchess of Pavy from *Love's Sacrifice* by J. Ford
- Vol.4: *Shakuntala* by Kalidasa
The Wandering Scholar from Paradise by H. Sachs
All for Love or The World Well Lost by J. Dryden
The Martyrdom of Ali from *The Persian Miracle Play* of Hasan and Husain

この内容から、*Little Theatre Classics* が、ヨーロッパの演劇に加え、インドやペルシアそして日本の劇作を収録したアンソロジーであり、その最も大きな特徴が、これらの劇作が全ていわゆる一幕ものであることが分かる。

この Vol.1 の序をエリオットは、“The Little Theater Movement is a fact.”という言葉で始めている。小劇場運動のパイオニアの一人として、様々な小劇場の状況を説明し、小劇場においては主として一幕ものが上演されるが、現実には上演できる演目が不足していること、そして、自らの経験からシェークスピアやシェリダンなどの古典演劇は資源(a natural resource)であると述べている。そして、このシリーズは、芸術的な劇場や本格的な演劇愛好者および学生などに忘れ去られているギリシア劇などの古典演劇を復活することを目的としておりと書いている。(iii-xi) *Little Theater Classics* は、日本では、あまり存在が知られていないが、アメリカでは、大学図書館のみならず多くの公共図書館に所蔵され、現在でもペーパーバックの復刻版を容易に入手することができる。表題紙裏には、商業劇場とアマチュア劇団が上演する際の使用料金の表示があり、また、Vol. 3 に掲載されている 2 枚の写真をはじめとして大学の演劇部の公演写真も掲載されていること、エリオット自身が「学生のために」と述べていることから、*Little Theater Classics* は、小劇場以外にも、大学の演劇のコース等に用いられたものと考えられる。

2.3 エリオットの *Bushido*

Little Theater Classics の Vol. 3 に収録されている *Bushido from Terakoya or Matsu* by T. Idzumo について、エリオットは、その序でフローレンツのフランス語版である *Scènes du théâtre japonais: L'école de village: Terakoya: drame historique en un acte* を英語訳したことを説明している。さらに、フローレンツのフランス語版に掲載されている源蔵が千代に斬りかかる場面の挿絵(新井芳宗 作)を日本で上演された際の正確な記録であるとして、Vol. 3 の巻頭の口絵として転載し、首実検の場の挿絵を文章中に転載している。

この巻には、*Bushido from Terakoya or Matsu* by T. Idzumo 以外に、シェークスピアの *Pericles* 等、計 4 つの演劇台本が収録され、それぞれの作品には、台本以外に、Introduction(序論)、Staging(舞台装置他)、Characters(登場人物紹介)が付されているが、特に、英訳された竹田出雲作「寺子屋」については、他の作品と比べても非常に長い 8 ページにおよぶ序論が付されている。

“*Bushido is the code of honor of Japan.*”という説明で始まるこの序の冒頭部分で、エリオットは、17 世紀のスペインの演劇を引き合いに出したうえで、“But not even in Lope de Vega and Calderon is loyalty so exalted as in the plays of old Japan, that still draw crowds and inculcate Bushido.”と述べ、古い時代の日本の演劇が、(日本では)いまだに観客に「武士道」を教え込む役割を果たしていると説明している。続いて、16 世紀の日本での能の発生やその後の大衆演劇としての“*shibai*”である歌舞伎を“*ka-bu-ki, meaning song-dance-performance*”と紹介し、文楽についても説明をした上で、“the innocuousness and positive moral effect of the marionette performances may in turn have opened the eyes of the authorities to the educational possibilities of the drama”と述べている。日本において、文楽や浄瑠璃が庶民に非常に人気があった一方で、文明開化を目指す明治政府が浄瑠璃を含む邦楽一般を学校教育から締め出したことを考えると史実に反するのであるが、翻訳者であるエリオットは、歌舞伎や文楽には、民衆を道徳的に教化する効果があり、為政者も歌舞伎や文楽が、武士階級のロイヤルティである「武士道」を民衆に教育する

可能性を認識していたのではないかと述べている。この解釈にはおそらく新渡戸稲造の *Bushido* における「寺子屋」の説明や“The innumerable avenues of popular amusement and instruction—the theatres, the story-teller's booths, the preacher's dais, the musical recitations, the novels—have taken for their chief theme the stories of the samurai.”(Nitobe 106)[大衆の娯楽と教育の手段、芝居、寄席、講談、浄瑠璃、小説などの主な題材はすべてサムライの話から取られていたのだ。](新渡戸 166)という記述が念頭にあったものと思われる。

エリオットは、この解説に続いて、劇中で松王丸が詠ずる菅丞相の和歌「梅は飛び桜は枯るる世の中に何とて松はつれなかるらん」を翻訳する際に、意図的に「武士道」という言葉を使い、“The Plum-tree has followed me into exile; The Cherry-tree died for my cause; —Should the Pine-tree alone be false and vile, Ignoring Bushido's laws?”としたことを述べている。そして、松王丸が我が子を犠牲にすることを説明して、“this is the substance and the lesson of our play”と述べ、この部分が劇の主題であることを強調している。

原作でのこの和歌は、「梅王丸は主を慕って流刑地に赴き、桜丸は忠義故に自害した。それなのにどうして松王丸はつれないのだろうか、いやつれないはずはない」という菅丞相の松王丸に対する信頼が込められている。劇中では、松王丸は主君が自分を信じてくれているのに、世間の人々はこれを「松王丸はつれない」という意味に捉えていることを嘆くのであるが、前稿で説明したようにフローレンツの翻訳の際に反語の意味が失われ、さらにエリオットの翻訳では“Bushido's law”という言葉を加えたために、松王丸に対する君主の非難がより強調される結果となっている。

エリオットの翻訳のもう一つの特徴は、舞台や大道具、小道具から衣装、俳優の動作に至るまで、新井芳宗の挿絵に基づいた詳細な説明を添えている点であろう。例えば、回り舞台や花道の効果を説明して、日本の舞台は真のリアリズムだと解説している。そして、寺子屋の舞台を、30cm 位の段差のある上下 2 段構造、正面奥は障子で、中央の 1 枚が開いていて、役者たちはここから出入りする、舞台の下段

の下手から 3 分の 1 の場所には、木の格子で作られた扉があるなど、挿絵に基づいて細かく説明している。さらに、中庭には、劇中で使われる和歌のイメージを強調するために、松・桜・梅が植えてあるのが見える等の他、衣装や乗り物のかご等についても、細かい指示をしている。

序論の中でも述べているように、エリオットは、マークス翻訳の *Pine-tree(Matsu)* がワシントン・スクエア・プレイヤーズにより *Bushido* のタイトルで上演されて絶賛され、その後、他の劇場でも上演されたことをよく知っていたものと思われる。*Little Theater Classics* の出版に際して、あえてフローレンツのフランス語版を翻訳した大きな理由の一つには、フランス語版の挿絵がリアルな日本の歌舞伎の舞台を伝えていたことが挙げられよう。また、ワシントン・スクエア・プレイヤーズの上演が絶賛される一方で、マークスの翻訳については、“His awkward lines have nothing of the delicacy and little of the reticence and suggestiveness which, as scholars assure us, are characteristic of Japanese poetry. To do it justice in English, “The Pine-Tree” needs a translator who can write in the style of Mr. Masefield's superb Japanese drama, “The Faithful.” (Woodbridge 67-68) という指摘があったことも、エリオットが自身で翻訳する動機となったのではないかとと思われる。

3. エリオットの翻訳の特徴

3.1 「寺子屋」翻訳・翻案等の概要

「寺子屋」の最初の英訳は、1888 年に第一高等中学校の教諭だった井上十吉が *Terakoya, or the Village School* であり、同書の出版社である吉岡書店から同年 6 月に刊行された『第一高等中学校入学試験科目例題』の後表紙には忠臣蔵の英訳と並んで同書の「近刻」の広告があるので、英語の学習用として出版されたものと思われる。同書は、1890 年には 2 版と版を重ねたことが確認されている。1900 年には、フローレンツがドイツ語に翻訳した *Terakoya und Asagao*、フランス語に翻訳した *Scènes du Théâtre Japonais: L'école de Village: Terakoya: Drame Historique en un Acte* が出版された。アメリカでは、1916 年にマークス翻訳の *The Pine-tree (Matsu) a Drama, Adapted from*

the Japanese; with an Introductory Causerie on the Japanese Theatre が出版されたが、この英訳は前稿で説明したようにフローレンツのドイツ語版を英訳したものであった。1921年には本稿で取り上げるフローレンツのフランス語版をエリオットが英訳した *Bushido form Terakoya or Matsu by Takeda Idzumo* が出版された。1934年にはキンケイド(Kincaid, Zoë)らによる *The Village School* がある。

戦後はGHQによる上演禁止が解けた後、1956年にスコット(Scott, A. C.)による作品解説 *Terakoya* が *The Kabuki Theatre of Japan* に収録され、1959年にはアーンスト(Ernst, Earle)による *The House of Sugawara* が出版された。1979年にはライター(Leiter, Samuel L.)による *Sugawara's Secrets of Calligraphy* が、1985年にはジョーンズ(Jones, Stanleigh H. Jr.)による *Sugawara and the Secrets of Calligraphy* が出版されている。

これらを概観すると、アメリカにおける1900年代初頭の翻訳が「寺子屋」単独の翻訳であるのに対して、戦後の翻訳の大半が『菅原伝授手習鑑』全幕の翻訳であることが分かる。『菅原伝授手習鑑』は天神信仰の系譜に繋がる作品であり、松王丸の主君の菅丞相は神道の神である天神である。一方、「寺子屋」の段を単独で見た場合、神としての菅丞相が登場することとはなく、また、前後のストーリーも分からないために神格を持つ主君への恩義と人情の板挟みに苦しむ源蔵夫妻の苦悩も理解しづらいため、松王丸の忠義のみが強調される傾向が見られる。一方、GHQによる「寺子屋」の上演禁止は、「桜丸の切腹とか、寺子屋の身替わりだけを見せれば、その場面だけが浮き上がって目立つ。だが通し狂言にすれば、それが際立たなくなる」という理由で全幕の通し上演を条件に解除された。(岡本 352) つまり、武士ではない桜丸が切腹する三段目の『賀の祝』や四段目の『寺子屋』だけを部分的にみると、切腹や首実検という封建制度の規範を賛美しているかのように理解される可能性があるが、作品全体としてみれば、権力争いに巻き込まれた末端の人々の悲劇が描かれている作品であることが理解できるという考え方である。アメリカの戦前の『菅原伝授手習鑑』の翻訳が『寺子屋』のみであった一方、戦後の翻訳がほぼ『菅原

伝授手習鑑』全幕の翻訳であることは、部分ではなく作品全体として理解すべきであるという考え方に基づくものであると考えられる。

3.2 翻訳テキストの相互比較

マーカスの *The Pine-tree(Matsu)* とエリオットの *Bushido form Terakoya or Matsu* の本文を台詞とト書きを整理して対応する箇所を比較し、エリオットが新たに加えたと考えられる改変について考察を試みる。前述したとおり、*The Pine-tree(Matsu)* と *Bushido form Terakoya or Matsu* の翻訳が一致しない箇所については、原文または他の英訳との比較を試みた。

3.2.1 タイトルの変化

フローレンツのタイトルは、フランス語版が *L'école de village: Terakoya*、ドイツ語版は序文の最初で、*Terakoya oder "Die Dorfschule"* としている。この「村の学校」という翻訳には、「寺子屋」の最初の英訳である井上十吉のタイトル *Terakoya: or the village school* が影響していると思われる。江戸時代の教育機関である「寺子屋」は都市部にも存在したが、『菅原伝授手習鑑』の四段目の「寺子屋」は京都の郊外の村が舞台であるため、「村の学校」(the village school)としたものであろう。「寺子屋」は、近世日本においては、罪のない母親と子供を殺そうとする源蔵夫婦の苦悩が前半のハイライトとされているが、前稿で述べたようにフローレンツが翻訳に当たってこの部分を省略したことにより、首実検の懊悩と小太郎と桜丸を偲ぶ松王丸の嘆き、松王丸の忠誠と親子愛の葛藤がより強調されることになった。このため、マーカスはドイツ語版からの英訳に当たって、悲劇の主人公「松王丸」を想起させる *The Pine-tree(Matsu)* にタイトルを変えたものと思われる。さらに、1900年に出版された新渡戸稲造 *Bushido: the Soul of Japan, an Exposition of Japanese Thought* の影響により、脚本 *The Pine-tree (Matsu)* は *Bushido* のタイトルで舞台上演され、また、エリオットの英語訳も *Bushido form Terakoya or Matsu* のタイトルで出版された。つまり、タイトルの変化は、武士の忠義の強調という主題のシフトと呼応しているといえることができる。

3.2.2 「武士道」精神の強調

エリオットにみられる武士の忠義の強調について、劇中の「梅は飛び桜は枯るる世の中に何とて松はつれなかるらん」という和歌の翻訳を見てみよう。「つれなかるらん」は反語であり、この和歌には本来「どうして松はつれないのだろうか、いやつれないはずはない」という意味が込められている。

マーカスの *The Pine-tree* では疑問文として翻訳されて反語の意味は残っているが“so lofty and fair”を加えたために非難の意味が強まっている。エリオットはこれを“be false and vile,”とした上で、原作にはない“Bushido’s laws”という言葉を追加し、“Ignoring Bushido’s laws?”武士道の掟をないがしろにするのか? という節を付け加えている。

The Pine-tree (Matsu)

The plum-tree follows me through the air,
Withered and dried is the cherry-tree.
Should then the Pine-tree so lofty and fair
Alone be heartless and faithless to me? (117)

Bushido from Terakoya or Matsu

The Plum-tree has followed me into exile;
The Cherry-tree died for my cause;
— Should the Pine-tree alone be false and vile,
Ignoring Bushido’s laws? (44)

ちなみに、戦後の翻訳を見ると、1956 年のスコットの作品紹介では「つれないの」訳語として“coldhearted”が、1959 年のアーンストの翻訳では“indifferent and aloof”が使われ、逐語的かつ元の日本語の意味に近いものになっている。

<スコット訳>

In a world in which the plum blossom was blown away
and cherry blossom perished... How can the pine remain
coldhearted, (269)

<アーンスト訳>

The plum has flown to stand by me, the cherry has
withered in my service. But why in this cruel world —

does the pine alone stand indifferent and aloof? (126)

次に、松王丸が「もつべきものは子なるぞや」と言うと、千代が「草葉の陰で小太郎が、聞いてうれしう思いませう。」と答えるという台詞の翻訳を見てみよう。マーカスの *The Pine-tree (Matsu)* では、松王丸と千代が“Thou saviour of our honour!” (私達の名誉の救い主) と繰り返す。エリオットの *Bushido from Terakoya or Matsu* では、“preserved the honor of our house” (我が家 (いえ) の名誉を保った) となっている。原文と読み合わせると、この部分の相違は、フローレンツのドイツ語訳とフランス語訳の相違に由来していることが分かる。ただし、エリオットがフランス語訳に使われていない「家」という言葉を加えたため、原作にはない「家の名誉」という概念が加えられたことになる。

<フローレンツのドイツ語版>

Matsuō.
O mein teurer Sohn,
Du Retter unsrer Ehre!
Chiyo.
Retter unsrer Ehre!
Ja, lass uns dieses Wort dem sel’gen Geist (34)

<フローレンツのフランス語版>

MATSUOŌ.
Ah! Mon fils, tu as sauvé l’honneur de ta famille.
TCHIYO.
Oui, il a sauvé notre honneur et à ce titre sa mémoire
restera à jamais gravée dans notre cœur. (28)

The Pine-tree (Matsu)

MATSUŌ.
My son! My son! Thou saviour of our honour!
MISTRESS CHEEYŌ.
Saviour of our honour... yes! Let us repeat these words.
(121)

Bushido from Terakoya or Matsu
MATSUO

Oh, my son! Through thee I was permitted to atone!
Thou hast preserved the honor of our house!

CHIYO

Ay, he has saved our honor, and for that his memory
shall be graven in our hearts forever! (46)

他の翻訳の松王丸と千代の台詞を比べると、井上十吉の翻訳が、最も原文に忠実であると思われる。

<井上訳>

MATSUOMARU— Ah! What one should most possess
is a child.

CHIYO—In his resting-place under the grass, will not
Kotaro, hearing this, rejoice? Your words, “What one
should most possess is a child,” will serve as a sweet
offering to his shades. (18-19)

<アーレスト訳>

MATSUŌ. Fortunate is the man who has a son—
(千代のセリフは略されている。)(127)

これらを総合すると、特にエリオットの翻訳で、「家」や「忠義」と「武士道」が強調されていることは明らかだと思われる。

なお、翻訳に当ってフローレンツは観客に分かりやすくするために、原文にはないセリフを加えているのだが、エリオットは、本文に演技上の指示を非常に多く加えるとともに、一部のセリフを改変し、追加している。このような例として、源蔵が「いま一人は管丞相の御恩をきながら。時平に随う松王丸。こいつ病み毫ながら検分の訳と見え数百人にて追取巻。」という箇所をみてみよう。

<フローレンツのドイツ語版>

Genzō.

Neben ihm

Stand Matsuō, der einzige bei Hofe,
Der Shūsai kennt, vom Kanzler aufgefordert,
Die Echtheit ihm des Kopfes zu verbürgen.
Auch der hat also ganz den alten Herrn,
Die reiche Gunst, die er von ihm erfahren,

Vergessen, und verrät nun seinen Sprössling,
Der Schändliche. Kaum trägt er seine Knochen,
So ist er krank und schwach; doch Bubenthaten,
Verrat ausüben, dazu hat er Kraft,
Nun, höre, was es gift. (13-14)

<フローレンツのフランス語版>

GHÈNZŌ.

Matsuō, le seul des hommes de Shihéi qui connaisse
Shyousai, était avec eux; c'est lui doit constater si la tête
est bien celle du jeune seigneur. L'ingrat! non seulement
il a oublié les bienfaits dont Mitchizané l'a comblé
autrefois, mais il va même jusqu'à trahir son fils. Il est
malade au point de pouvoir à peine se tenir debout!—la
haine seule lui donne la force de commettre cette lâcheté.
(12)

The Pine-tree (Matsu)

GANZŌ

Beside him

There stood Matsuō, he, the only one
At court, who knows Shoozigh. The chancellor,
So that the head might be identified,
Had summoned Matsuō. Oh shame, oh shame!
He, too, then, has forgotten our old lord,
Forgotten gifts, support, and aid; and now
Betrays his offspring. What disgrace! So ill
Is he, so weak, his feeble limbs can scarce
Support him. But for crime and treachery
He still has strength. (97-98)

Bushido from Terakoya or Matsu

GHENZO

Then I saw Matsuo the Pine-tree, the only one of Shihei's
men who knows Shusai! He is with them, and on him
they must depend to recognize the head: he (with
growing passion) must confirm the death of his young
lord — forgetting, oh, the ingrate! all the good the house
of Mitchizane heaped on him in olden days, — the exile
and the death of his twin brothers, faithful to their lord,
— [Overcome with fiery indignations he breaks down.

TONAMI (softly)

Remember, — he took service with Shihei before the feud began — when all were friends.

GHENZO

I blame him not for that, but that he dares to seek the life of the last son of his old liege, his father's liege, who named him! He betrayed Shusai! — he came to see the child assuredly killed. He is sick — so feeble that he scarce can stand upright. Only his hate — perverse, incredible hate! — gives him the strength to carry through this base, cowardly — Oh — (His feelings again overcome him; but with his left hand he restrains Tonami from speaking, and resumes low and tense) (31-32)

マーカスはフローレンツの台詞をほぼ忠実に訳しているが、エリオットの場合は、演技の指示を加え、戸波の台詞を加筆し、さらに、“the exile and the death of his twin brothers, faithful to their lord”等を加えて、三つ子の兄弟の忠義と犠牲をより強調する内容としている。

4.おわりに

9 世紀に大宰府に流されてその地で没した菅原道真の怨念の伝説は脚色され、天神信仰と呼ばれる多くの伝説を生んだ。平安時代後期の『大鏡』や南北朝の『太平記』に取り込まれた後、その後、武家の演芸であった能の作品『雷電』（別称『妻戸』）が成立し、次第に古浄瑠璃にも取り込まれ、最古のものでは 1681 年に刊行された宇治加賀掾の段物集『大竹集』の「虎巻、管丞相 乱曲」が伝えられている。1713 年には、天神伝説の集大成である説話集成『菅家瑞応録』の伝説を取り入れた、近松門左衛門作『天神記』が竹本座で初演された。『菅原伝授手習鑑』は『天神記』を背景に、竹田出雲・並木千柳・三好松洛・竹田小出雲により親子の別れを競作する作品として企画され、延享 3 年(1746)年 8 月 21 日、大阪・竹本座で初演され、同年 9 月に京で歌舞伎化された作品である。

日本では四段目の「寺子屋」を 1888 年に井上十吉が学習教材として英訳し、その後、1900 年(明治 33)にカール・フローレンツが「寺子屋」をドイツ語と

フランス語に翻訳し、ドイツとフランスで販売して欧米圏に広まった。カール・フローレンツの翻訳姿勢とフローレンツが翻訳の際に加えた改変については前稿で触れたが、フローレンツは、「寺子屋」の翻訳に先立つ 1895 年(明治 28)に、日本の詩歌の翻訳に関して上田萬年と「最初の比較文学論争」と呼ばれる翻訳論争を繰り広げていた。その中でフローレンツは、読者である欧米の人々に配慮するゲーテの翻訳理論に基づき、異なる文化間にあって翻訳する場合には到達言語—ドイツ語やフランス語—の読者に分かりやすい翻訳を行ったことを説明している。同様にフローレンツは、「寺子屋」の翻訳に際しても、西欧の読者に分かり難いと考えた竹本、すなわち、語り・ナレーションの部分を省略し、台詞として補足したことを序文で説明している。

さらにフローレンツは、「寺子屋」の主題は武士の忠誠と親子の愛であり、それは、世界の数多くの文学に共通して認められるものであると述べている。これは、人類普遍のテーマを取り扱うという世界文学の一つの考え方である。フローレンツはさらに、「寺子屋」では牛飼い舎人という地位の松王丸を侍と理解し、西洋の騎士道物語に通ずるものとして「寺子屋」を捉えていたものと考えられる。なお、同じような理解は、フローレンツの「寺子屋」の出版と同年の 1900 年に新渡戸稲造がアメリカで出版した *Bushido: the Soul of Japan, an Exposition of Japanese Thought* においても説明されていた。これは、『菅原伝授手習鑑』という劇全体でみれば、松王丸が侍の家の出ではないことが分かるが、四段目『寺子屋』だけを独立して見た場合には、松王丸の出自は明らかにされないため、松王丸が武士であると理解したものと想像される。

では、このようなフローレンツの翻訳姿勢や「寺子屋」の理解は、アメリカにおける「寺子屋」の受容にどのような影響を与えたのであろうか。前稿で論じたように、日本では「寺子屋」の名セリフとされる「せまじきものは宮仕へ」がフローレンツ系の英訳では略され、この省略により「寺子屋」の前半の忠義のために罪のない子どもを手にかける源蔵夫婦の煩悶の比重が軽くなり、後半の松王丸夫婦の苦悩に焦点がおかれることになった。

このようにテーマがシフトした結果、これを反映して台詞が書き換えられ、タイトルも、源蔵の営む「寺子屋」から松王丸＝*The Pine-tree*へと変化し、それに新渡戸稲造の *Bushido: the Soul of Japan, an Exposition of Japanese Thought* の影響が加わり、ワシントン・スクウェア・プレイヤーズの上演に際しては、武士の忠義を強調する *Bushido* というタイトルが使われた。同様にエリオットによる *Bushido from Terakoya or Matsu* も元々のタイトルの *Terakoya* に松王丸を表わす *Matsu* を副題として補った上で *Bushido* というタイトルを使っている。エリオットによる *Bushido from Terakoya or Matsu* では、序文においてエリオット自身が認めているように、原作にはない「武士道」や「家」などの言葉をセリフに織り込み、「武士道」と「忠義」の精神が強調される改変が加えられた。なお、エリオットは序文で、日本では歌舞伎は「武士道」を武士階級ではない庶民に教え込む役割を果たし得ると述べているが、演劇人として名高いエリオットの歌舞伎に関するこのような見解は、当時のアメリカ演劇界では一定の影響を持って受け取られたと考えられる。

今回は、主としてエリオットによる英訳「寺子屋」の本文研究により、20世紀初頭のアメリカにおける「寺子屋」の変質と受容について考察したのであるが、本稿を書き進めている途中で、1934年に出版された Atsutarō Sakai 翻訳、Zoë Kincaid により演劇的な表現に改められた「寺子屋」の英訳の存在を University of California, Davis の名誉教授 Robert Borgen 博士から教えていただいた。今後、アメリカにおける第二次世界大戦前の「寺子屋」の受容とそれが戦後の GHQ による文化政策に与えた影響を精査するためには、Sakai / Kincaid の英訳とアメリカでの上演について調査するとともに、「寺子屋」の上演を禁止した GHQ 側の資料の分析も必要であり、今後の課題としたい。

フローレンツ訳「寺子屋」の伝播は、2010年に、1913年にオルフが作曲したドイツ語のオペラ『犠牲』が初演され、2012年には『犠牲』とワインガルトナー作曲のオペラのコンサート・ヴァージョンの公演が行われるなど、現在も進行している。ヨーロッパにおける変質と伝播については、スペイン語版

をはじめとして、目録情報で翻訳がなされたことは確認できても研究者によるテキストの存在確認がなされていないものもあり、これらのテキストの確認も今後の課題としていきたい。

<参考資料>

- 赤坂治績『知らざあ言って聞かせやしょう 心に響く歌舞伎の名せりふ』新潮社 2003
 石澤小枝子『ちりめん本のすべて』弥井書店 2004
 犬丸治『菅原伝授手習鑑』精読 歌舞伎と天皇』(岩波現代文庫) 岩波書店 2012
 岡本嗣郎『歌舞伎を救ったアメリカ人』(集英社文庫) 集英社 2001
 魁竜玉『演劇脚本』大阪：梅原忠蔵 1895-96
 河竹登志夫『演劇の座標』理想社 1959
 佐藤マサ子『カール・フローレンツの日本研究』春秋社 1995
 園義雄『アメリカ新劇史』五月書房 1951
 田中徳一「ドイツ、オーストリア、ガリチアにおける『寺子屋』劇受容の概観」日本比較文学会編『世界と出会う日本文学—日本比較文学学会創立60周年記念論文集』彩流社 2011 261-73.
 中西貞行『菅原伝授手習鑑』中西貞行 1894
 中村哲郎『西洋人の歌舞伎発見』劇書房 1982
 新渡戸稲造 岬龍一郎訳『武士道 今依って立つべき“日本の精神”』PHP研究所 2005
 野口達二『歌舞伎 入門と鑑賞』演劇出版 1991
 アンソニー・ピム 武田珂代子訳『翻訳理論の探求』みすず書房 2010

- Eliot Jr., Samuel A. *Little Theater Classics*. 4 vols. Boston: Little Brown. 1918-22.
 Ernst, Earle. *Three Japanese Plays from the Traditional Theatre*. London: Oxford UP, 1959.
 Florenz, Karl. *Scènes du Théâtre Japonais: L'école de Village: Terakoya: Drame Historique en un Acte*. Tokyo: T. Hasegawa, 1900.
 _____. *Terakoya und Asagao*. Tokyo: T. Hasegawa, 1900.
 Inoue, Jukiti. trans. *Terakoya, or the Village School*. Tokyo : T. Yoshioka, 1888.

- “Japanese Tragedy Admirably Staged, “Bushido” the Climax at the Washington Square Players’ Finest Program.” *New York Times*, 14 Nov. 1916, 8.
- Jones Jr., Stanleigh H., ed. and trans. *Sugawara and the Secrets of Calligraphy*. New York: Columbia UP, 1985.
- Kramer, Richard E. “The Washington Square Players: Art for Art’s Sake” *Theatre History Studies*, 25(2005): 149-72.
- Marcus, M. C. *The Pine-tree (Matsu) a Drama, Adapted from the Japanese; with an Introductory Causerie on the Japanese Theatre*. New York: Iris, 1916.
- Nitobe Inazo. *Bushido: the Soul of Japan, an Exposition of Japanese Thought*. Tokyo: Shokwabo, 1901.
- Pronko, Leonard. “Terakoya: Kabuki and the Diminished Theatre of the West.” *Modern Drama*, 8(1965): 47-57.
- Scott, A. C. *The Kabuki Theatre of Japan*. London : Allen & Unwin, 1956.
- Takeda, Izumo. “The Village School” *One-act Plays for stage and Study, eighth series; Twenty Contemporary Plays*. New York: S. French, 1934. 147-96.
- Woodbridge, Homer E. “A Flood of Foreign Drama.” *The Dial*, 734(1917): 67-70.
- Woollcott, Alexander. “Second Thoughts on First Nights.” *New York Times*, 19 Nov. 1916, Sec. II, 6.

(Received:January 22,2015)

(Issued in internet Edition:February 6,2015)